

令和 2 年度第 1 回 食育推進評価専門委員会
説明資料

食育に関するJAグループの取り組み － Withコロナと今後の食育 －



令和 2 年 8 月 1 8 日
全国農業協同組合中央会



本日の説明内容

1. 食育に関するJAグループの取り組み

2. Withコロナ(新しい生活様式)に向けて

3. 第4次食育推進基本計画に向けて



1-1 みんなのよい食プロジェクト

「みんなのよい食プロジェクト」を展開

○JAグループ全体の一取り組みとして、「みんなのよい食プロジェクト」を展開。心と体を支える食の大切さ、国産・地元産の豊かさ、それを生み出す農業の価値を伝える。



みんなのよい食プロジェクト

1-2 バケツ稲づくりセットの取り組み①

バケツ稲づくりセットの配布(JA全中)

バケツ稲づくりセット(バケツ1個分の種もみ・肥料・栽培マニュアル・お名前シールのセット)を配布。
バケツで稲づくりを体験することで、次代を担う子どもたちに、米や稲作文化、農業への理解を図る。

バケツ稲づくり

セットの内容

とっても
簡単!



- ① 種もみ …………… 「コシヒカリ」
- ② 肥 料 …………… 稲の成長を促す3種類の
肥料を配合。
- ③ 栽培マニュアル …… 芽出しから収穫まで、
栽培の基礎知識を写真と
イラストで解説。
- ④ お名前シール …… バケツ貼付用。



【配布実績】

○令和2年度は約25.4万セットを配布(小学4年生に対して24%換算)。32年間でのべ1,040万人が体験。

【公式ウェブサイト】

○申し込み受付のほか、教育者用指導書、観察ノート、栽培動画コンテンツ等を用意。

【指導者へのフォロー】

○地元JAで問い合わせに答えているほか、全国段階で事務局を設置。教師・生徒等からの質問を受け付け。
○また、教師が取り組みやすいよう、実施した学校の学習計画書(授業計画内容)を参考資料としてウェブサイトで紹介。

1-2 バケツ稲づくりセットの取り組み②

バケツ稲づくりセットの配布(JA全中)・続き

【学習効果】

- 学校から田んぼが遠く体験授業ができない地域の学校でも、稲作に取り組めるほか、稲の成長をきめ細かく観察できたり、できたお米に愛着を持ってもらえるとして取り組む学校が多い。
- 使い方は各学校に委ねているため、教員が独自に工夫を凝らし、様々な発展学習に繋げているケース(指導案)がある。
- 近年は、特別支援学校の子どもたちにも取り組みが広がっている。

【外部団体との取組み】

- 子ども会連合会が推奨。各地の子ども会に推薦している。

【安全への配慮】

- 種もみの誤飲対策として、薬剤を使わず温湯消毒をしたり、肥料の取り扱いについても、指導書上にわかりやすく表示するなど安全面の配慮に取り組んでいる。

【コロナ禍に伴う環境変化への対応】

- コロナ禍で校外学習への制限が出て、田んぼでの体験学習ができなくなったため、バケツ稲づくりに切り替えて稲作体験を継続したり、自宅学習で取り組む学校も出ている。

1-3 コンテスト等の開催①

「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクール(JA全中)

○ お米・ごはん食、稲作など、日本の食卓と国土を豊かに作りあげてきた稲作農業全般について、応募作品を作ることを通して学びを深めてもらうとともに、子どもたち(小中学生)の優れた作品を顕彰することを通じて、稲作農業の多面的機能と、お米・ごはん食の重要性を広く周知することを目的に開催。過去44回を実施。



内閣総理大臣賞「おむすびは勉強のおとも」



農林水産大臣賞「なえがいつ
ばいのるよ」



文部科学大臣賞「かまどのごは
んっておいしい!!」

【実績】...第44回コンクール応募数
作文 50,660作品
図画 60,767作品
合計 111,427作品

【概要】

○市町村段階・県段階・全国段階において、教育委員会や専門家などのご協力を得て実施。
44年間実施。作文・図画合わせて毎回10万作品以上の応募を集める。

【影響】

○参加者は大学進学時に農業・食に関する研究を行ったり、成人後に農業者やJA・食品関係業種に勤務する者も見受けられる(2020年度は開催中止)。

1-3 コンテスト等の開催②

【ザ・地産地消家の光料理コンテスト】(家の光協会)

米の消費拡大や地域内自給率向上をめざし、地元農畜産物を使用した料理、スイーツを募集。

○第1回～17回の累計応募作品総数は6,544点。

○「スイーツ」部門最優秀賞作品は、ホテルのランチビュッフェの期間限定メニューとして提供



【食農教育紙芝居コンクール】(家の光協会)

子どもたちにいのちや食べ物、農業のたいせつさを分かりやすく楽しく伝えるための「紙芝居」を毎年募集(今年で11回目)している。

○優秀作品はレプリカを作成し、JAの親子イベントなどで活用。ウェブサイト「家の光公募サイト」(<https://www.ienohikari-koubo.com/>)から一般の方もダウンロードすることが可能。

○「野菜大好き芸人」としても知られるタレントの小島よしお氏が、本コンクールの第3回最優秀賞作品(「コンタのあついひ」)および第6回最優秀賞作品(「みみずずんずん」)を演じた動画をYoutubeの「家の光チャンネル」で公開中。

【農検栽培コンテスト】(農協観光協会)

全国の中学校・高校・特別支援学校の生徒さんを対象に実施しており、「中学生・高校生が考える日本の農業、創意工夫した農作物栽培について」をテーマとした栽培コンテスト(3年目)

1-4 「食」と「農」の情報発信①

【『ちゃぐりん』の発行】(家の光協会)

食農教育の重要性が増すなか、農業、食べ物、健康、自然、いのちのたいせつさを伝え、子どもたちの思いやりと助け合いの精神を育む雑誌。

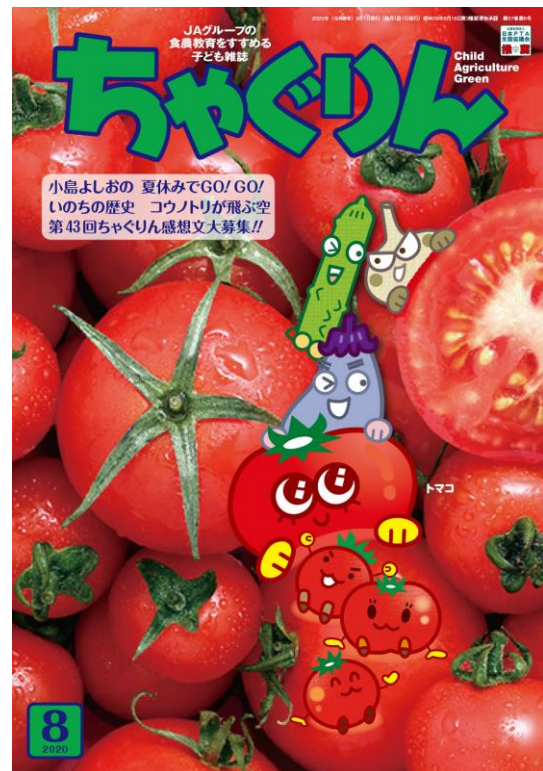
連載企画例:「藤田先生のあっぱれやさい塾2020」「わたしたちSDGs研究会！」

○令和元年度(6月号～5月号)累計部数は576,996部

○第65回学校読書調査

(毎日新聞社主催、2019年調査)の「ふだん読んでいる雑誌」では 小学5年生、6年生男子でともに4位。

2020年8月号の食&農特集企画は「夏野菜で作る すりおろしドレッシング」。旬の野菜を「すりおろす」ことで、そのまま食べるよりも栄養吸収がよくなることなどを紹介しながら、楽しく野菜のおいしさを伝える。写真のキュウリドレッシングはARに対応しており、スマートフォンで動画を見て学ぶこともできる。



1-4 「食」と「農」の情報発信②

【食と農に関する情報を発信】 （日本農業新聞）

- 全国日刊の特性を生かした情報発信は、農業者だけでなく広く国民各層から注目を集めている。
- 2020年4～6月の公式ホームページ閲覧数は100万PVを超える。
- 野菜の相場や米の作柄などTVの情報番組から問い合わせも相次いでおり、専門分野の情報源として一定の評価。

【直売所向けフリーマガジン （フレマルシェ）の発行】

（日本農業新聞）

- 全国のJA直売所約700店舗で配布
- 発行は年4回、部数は各25万部。
- 直売所ならではの農産物や、旬の食材をよりおいしく食べるアイデア、料理レシピ、食と農をテーマにした著名人インタビューなどを掲載。



日本農業新聞・食と農に関する特集面（毎週土曜日付）



1-5 補助教材(テキスト)の配布

【小学校高学年向けの教材本を制作し、全国の小学校および海外日本人学校に贈呈】(農林中央金庫)

小学校の授業において、補助教材として活用されることを目的とする食農教育・環境教育・金融経済教育を基本テーマとした冊子を提供。

我々の生活を維持するために必要な「食」とこれを生み出す農業、環境と農業のかかわり、さらに安定した食の供給のための流通や農産物価格の決め方等について総合的に学習することで、農業に対する理解を多面的に広げていくことをねらいとしている。

○JA・県中央会・信連等が連携し、補助教材を活用した出前授業を開催するなど、生活に身近な食と農について興味・関心を持ち、理解を深める契機となっている。

○授業等で教材を活用した児童からは、「お米や野菜が作られるにはたくさんの手間がかかっていることが分かった」、「農業をする人が高齢化して減っているので、農業をやってみたい」などの感想があり、教師アンケートでは、教材本は使いやすかったですかの問いに対し、「とても使いやすい」、「使いやすい」と答えた方が70%以上となっている。

○累計部数

令和2年度版までを配布し、累計は1,777万部となります。



1-6 教育資材の貸出

【「食農教育紙芝居コンクール」入選作品の貸し出し】(家の光協会)

○第1回～10回「食農教育紙芝居コンクール」入選作品の貸し出し。ダウンロードも可能。



【「お米を知ろう！ パネル」、
「惣一じいちゃんの「食と農かるた」
の貸し出し】(家の光協会)

○お米についての基礎知識を学べる食農教育パネル（5枚セット）



○「食と農」について遊びながら学べるかるた(A5サイズ)



1-7 研修会の開催①(JA職員等の人材育成)

【全国JA家の光食農教育リーダー研修会】・【あぐりスクール全国サミット】 (家の光協会)

【全国JA家の光食農教育リーダー研修会】

○平成19～21年度までの「いのちと食と農を結ぶ 指導者養成講座」を継ぎ、平成22年度よりJA役職員・食農教育担当者、JA女性組織、JA青壮年組織リーダーなどを対象とした「全国JA家の光食農教育リーダー研修会」を毎年開催し、食農教育リーダーの育成をはかっている。平成19年度からの累計参加者数は延べ900名以上。

※令和2年度は新型コロナ感染拡大防止の観点から開催中止。

＜令和元年度東京会場 研修カリキュラム構成＞

- ・食の問題すべてに関わるSDGsを知ろう ・最新！食品ロス対策の今
- ・災害時、JAに期待すること ・「グラフィックレコーディング」ってどんなもの？
- ・交流会 ～MOTTAINAI CATERING～ ・すぐに使える！アイスブレイク
- ・グループワーク「食農教育を通じてできるSDGsの取り組みとは？」
- ・「ビギナー向け料理教室」のすすめ方

【あぐりスクール全国サミット】

○子どもたちが農業のたいせつさを学ぶ通年型の農業体験である「あぐりスクール」を開校しているJA、またはその趣旨に賛同するJAの役職員が一堂に会し、各地の実践事例に学ぶとともに相互研鑽、交流をはかり、JA次世代対策を積極的に推進することを目的に、平成17年度から「あぐりスクール全国サミット」を毎年開催している。

※令和2年度は新型コロナ感染拡大防止の観点から開催中止

1-7 研修会の開催②(JA職員等の人材育成)

【リスクマネジメント研修会】(農協観光協会)

- 農山漁村体験などに関して、
事故発生時や事後の対応も学ぶ研修
 - ・安全管理マニュアル作成のポイント
 - ・体験活動における保険
 - ・事故・災害発生時の対処方法 など



- 農泊事業に従事するJA職員はじめ、農山漁村体験・
自然体験活動の組織・団体及び協議会関係者や指導者などが対象
 - ・過去9年で1,000名の受講者

- 野外活動に精通した弁護士はじめ、長年グリーン・ツーリズムにおける地域振興に
取り組んできた専門家の講習やワークショップの実施
 - ・(講師)弁護士 早川 修氏、新潟経営大学教授 出口 高靖氏 ほか

- 本年6月には新型コロナウイルス感染症防止対策ガイドライン作成の参考となる研修を実施
 - ・事業者向けに60名が受講

1-8 田んぼの生きものの調査

【田んぼの生きものの調査】(JA全農)

○「田んぼの生きものの調査」を全国のJA、生産者、消費者、子どもたちと実施し、環境と農業の深い関わりや、生物多様性保全の大切さを「五感」で感じ取ってもらう活動。



田んぼの生きものの調査 活動模様

○本年度は新型コロナウイルスの影響で開催を中止している地域もある。開催時は3密を避けて細心の注意を払い実施。

○YouTubeの小学生向けの授業動画「小島よしおのおっぱっぴー小学校」とタイアップし、「特別授業 田んぼの生きものの調査」をYouTubeで放送中。

○Twitter全農広報部 田んぼの生きものの調査(@tanbozennoh)アカウントで情報発信中。

年度	開催数	参加人数
平成20年	47	2,225
平成21年	46	1,511
平成22年	15	739
平成23年	36	1,350
平成24年	45	2,149
平成25年	59	2,892
平成26年	60	3,192
平成27年	67	3,522
平成28年	68	3,596
平成29年	78	4,200
平成30年	83	4,027
平成31年	65	3,486
計	669	32,889

【親子農業体験の実施】

○親子参加型農業体験ツアー(株)農協観光がJAと共同で実施
(H29年度で約7000人が参加)

JA全農親子農業体験ツアー(実施回数:65回、総参加人数:2,556名 ※2005-2019年)

○野菜の植え付けや収穫、田植えや稲刈り等の体験を通じて、日頃農業と親しむ機会が少ない消費者と生産者の交流を深め、農業への理解を深めることを目的に、JAの協力を得て開催。

○今年度はコロナの影響で定植体験を中止とし、収穫体験のみ実施予定。



1-10 食育の実績

(一社) 家の光協会 ※いずれも令和元年度(3月末)実績

- あぐりスクール(児童を対象にした農業体験:通年型) 162JA登録
- ちゃぐりんフェスタ(児童を対象にした農業体験:単発) 111JA 19,895人参加
- JA家の光クッキングフェスタ 25都府県 44JA 52会場 8,260人
- JA家の光料理教室 136JA 23,479人
- JA家の光親子料理教室 115JA 12,657人

(全農)料理教室(実施回数:87回、総参加人数:2,609名 ※2006-2019年)

- 新鮮な国産農畜産物を使用した、小学生を対象とした親子料理教室と、障がいをもつ子どもたちを対象としたみんなの子ども料理教室を開催。食材の話や食育クイズも行っている。
- みんなの子ども料理教室については、協力いただける施設や団体と連携し、出張型の料理教室を実施。
- 今年度はコロナの影響で開催未定(代替案も検討中)

(JA共済連)

- 保育・幼稚園児、小中高大学生を対象とした農業体験学習・食育講座の開催
令和元年度 38県 参加人数 49,955名
- 地域住民を対象とした農業体験学習・施設見学会の開催
令和元年度 42県 参加人数 42,606名
- 地域住民を対象とした料理教室の開催
令和元年度 35県 参加人数 18,264名
- 地域住民を対象とした食農イベント、セミナー等の開催
令和元年度 19県 参加人数 39,014名



【日本農業検定】(全国農協観光協会)

「農」についての知識を深めよう！

仕事や趣味で農業の基礎的な知識を必要とする方のための検定で、過去の受検者は15,000人を超えました。「農業全般」「環境」「食」「栽培」の4分野について、基礎的な内容から総合的な内容までを段階的に習得できる検定試験で、どなたでもどの級からでも受検出来ます。

日本農業検定テキスト ＜新版＞ 日本の農と食を学ぶ

2020年4月に新版テキストを発刊し全国の書店でも販売しております。テキストは検定受検だけでなく職員研修の教材や農業書としても活用されています。



第8回日本農業検定実施要領

＜1級・2級・3級試験日＞

○団体受検（5名以上）

2021年1月8日～16日

○公開会場（東京・大阪）

2021年1月9日

○CBT会場（全国約250箇所）

2021年1月5日～16日

＜申込期間＞

○団体受検・公開会場

2020年10月1日～11月27日

○CBT会場

2020年12月1日～12月25日



本日の説明内容

1. 食育に関するJAグループの取り組み

2. Withコロナ(新しい生活様式)に向けて

3. 第4次食育推進基本計画に向けて

2-1 料理教室などでのコロナ対策

【新しい生活様式を実践】(家の光協会)

安心して料理教室を開催するための13のポイントをイラストでわかりやすく解説したチラシを配布。

新しい生活様式を実践！ 安心して料理教室を開催するための 13のポイント

新型コロナウイルスは①密閉空間 ②密集場所 ③密接場面の3つの条件がそろった場所で、集団感染のリスクが高まります。衛生管理をしっかり行いながら料理教室を楽しみましょう。くれぐれもおしゃべりは控えめに。

- 発熱や風邪の症状がみられる場合は参加を控える**
①しゃみ、せき、鼻漏れや目のかゆみがある
②家族などの身近な人に感染が疑われる
参加者の体調(鼻漏れ、せき)を事前に把握
- 人と人との間隔が2m(最低でも1m)以上になるように**
①調理台1台につき2-3人または通常の半量を目安に
②できるだけ共同作業のない内容にする
- 調理室の清掃、調理器具や作業台の洗浄・消毒を徹底**
①トナリや調理器具、食器類の消毒、水道の蛇口など大気と触れる場所も忘れずに
- エプロンと三角巾、マスクをかならずつける**
①マスクは手洗いを準備のトイレに行くときは、すべては必ず
②調理中はマスクとできればフェイスシールドも着用
- 指輪、時計をはずし、マニキュアはとる**
- 調理室に入るときは、うち履きに履き替える**
- 手はこまめに洗い、アルコール消毒**
①食事前の朝と夜にそれぞれ必ず手洗い
②食事中の調理時もこまめに手洗い
- エプロンで手を拭かない。清潔なタオルやペーパータオルを使う**
- 手に傷のある人は、かならず使い捨てビニール手袋をつける**
①できれば傷のない人も
- 会場はこまめに換気、夏場はエアコンを有効活用**
- 試食は、横並びまたは椅子の配置を交互にして、向かい合わないように**
①心当たりがあるものを食べない、全部は控えめに
②手洗いは原則持ち帰らない(持ち帰る場合は個人で徹底管理を)
- 盛り付けは、大皿を避けて1人分ずつ個々に**
①盛り付けした料理にはフタをかける
- 調理中は髪や顔を触らない**

参考:厚生労働省「新しい生活様式」の解説

マスクの着け方チェックポイント

✓ 上下と表裏が正しい

※外は清潔な面、内は汚れた面が基本

①パッケージに書かれた使用法が基本
②文字やイラストがプリントされている場合は、文字が正しい面、イラストが正しい面が表裏(外側)

③ブリーチ(ひだ)がある場合は、ブリーチが下向きになっている面、または、ブリーチが白濁に見える、広げた時に自然に中央がふくらんで折り出す面が表裏(外側)

✓ 鼻の穴が隠れ、鼻の周りに隙間がない

✓ 頬に密着している

✓ あごの下までしっかり覆われている

マスクのはずし方

1 ゴムバンドを持つてはさず

①ウイルスが付着している可能性があるため、マスクの裏面(外側)は触らない

2 ビニール袋に入れ、口を閉じて捨てる

手洗いの基本

- 時計や指輪をはずす
 - ひじから下まで水でぬらす
 - 手洗い石けんをつける
 - よく泡立てる
 - 手のひらと手(50%程度)
 - 指の間、付け根(50%程度)
 - こころ大切! 親指洗(50%程度)
 - 手背洗(50%程度)
 - 手首洗(50%程度)
 - 水で十分にすすぐ
 - ペーパータオルでふく、タオル等の共有はしない
 - 乾いたペーパータオルをふく、乾いたペーパータオルをふく、乾いたペーパータオルをふく
 - アルコールを噴射する(水分が残っている状態)
 - 指先をすり込む(50%)
- ③～⑨までを2回くり返す
2回くり返し、首やウイルスを洗い流しましょう。

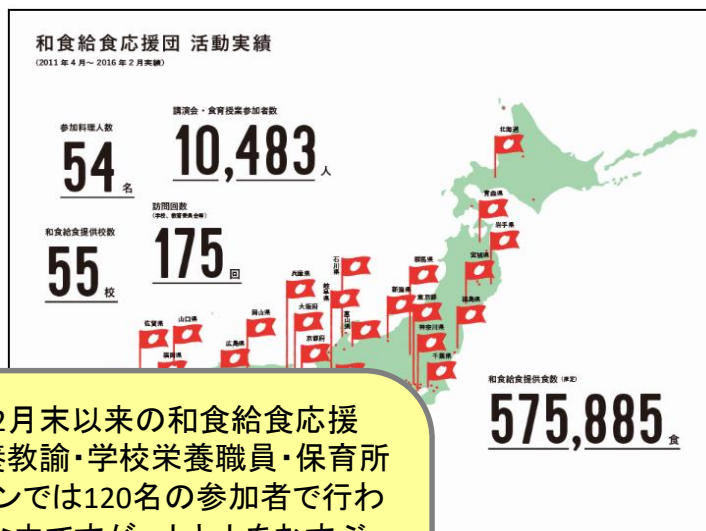
監修:女子栄養大学 衛生学

使わないことがあったら、地域の保健所へ問い合わせよう。

2-2 Withコロナ(新しい生活様式)に向けたJAグループの取り組み

- 新型コロナウイルスの影響下でも、3密回避に向けた取り組みを通じて、食農教育のさらなる推進につながっているケースがあり。
- 例えば、和食給食応援団(事務局:五穀豊穡)とJA全中において、栄養教諭等を対象に「和食給食セミナー」を毎年開催(全国15か所目標)しているが、今年はコロナ禍の影響でオンラインで開催。オンラインにより、通常参加できない他地域の方も参加ができ、大変好評。

【和食給食セミナーの取り組み(今年7月20日佐賀県)】



佐賀県佐賀市で2020年2月末以来の和食給食応援団！会場には6名の栄養教諭・学校栄養職員・保育所栄養士が参加。オンラインでは120名の参加者で行われました。コロナで大変な中ですが、人と人をむすぶ「おむすび」にかけて、今の学校給食のあり方を話し合いました。オフラインでは30名が限界の調理講習会も120名クラスでの実施ができるオンライン。このメリットを活かして、日本中、世界中を繋いだ配信を行いたいと思います(和食給食応援団Facebookより)。

2-3 Withコロナ(新しい生活様式)に向けて

- 第4次食育推進基本計画では、Withコロナに向けた取り組みを重点課題として考えるべきであり、家庭や学校に野菜キッドを送り栽培したり、農家がリモートやYouTube動画で指導を行ったり、VRを活用して農業をバーチャル体験するなど、食育をバーチャル体験できる新たな試みを進める必要。
- また、今後、オンライン化による授業などが進むことが想定されることから、学校におけるタブレットやWifiなどの情報インフラの整備とあわせて、動画で食育が理解できる素材やバーチャル体験など、関係省庁・団体が連携して取り組んでいくことが必要。

【食育のバーチャル体験の試み(JAグループ野菜の日)】

【コロナ禍における学校の取り組み例(NHK for school)】



今年の野菜の日(8月31日)、JAグループでは、ミニトマトを家庭に送り、オンラインで収穫体験を企画



今春の緊急事態宣言により、学校に行けない子供達には、動画を見て宿題を解くケースもあり(上記は小5社会の宿題で、NHKの動画を見て)。今後はオンライン授業等に対応した食育の取り組みが必要

本日の説明内容

1. 食育に関するJAグループの取り組み

2. Withコロナ(新しい生活様式)に向けて

3. 第4次食育推進基本計画に向けて

3-1 新たな食料・農業・農村基本計画と連動した取り組み強化

- 食育に関しては、今年3月の食料・農業・農村基本計画にあわせ、昨年11月のJAグループの政策提案において、①食料・農業・農村基本計画に掲げる目標・施策と連動した食育推進基本計画の実践・進捗管理、②食農教育や和食推進における関係省庁の連携強化などを提起。
- 食育推進基本計画の目標値と進捗状況を見ると、目標値が現実的でないものや現状値があまり変わらないものもあり、国民的理解を高めるという視点で、実効性ある食育基本計画の推進が必要。

【食育推進計画を作成・実施している市町村割合】

	平成30年度	(参考) 平成29年度
全市町村数	1,741	1,741
計画作成市町村数	1,476	1,380
計画未作成市町村数	265	361
作成割合	84.8%	79.3%

作成割合は年々増加しており評価。
今後は、新たな食料・農業・農村基本計画との連動とあわせ、「計画から実践」が重要。条例やアクションプランなど、地域で推進・具体化していくことが重要。

【学校給食における地場産物・国産食材の使用割合】

	地場産物	国産食材
単独調理場	24.4%	76.1%
共同調理場	29.8%	75.6%
全国平均	26.0%	76.0%

※地場産物は、都道府県内の食材を使用した割合。

国においては農水省と文科省、現場においては地方行政・学校教育機関(栄養教諭)と団体等が密に連携して、地産地消など国産の消費拡大に着実につなげていくことが必要。

3-2 食育やSDGsを起点とした国民理解の推進

○ 国民理解をさらにすすめていくためには、食育やSDGsを切り口に経済界等を巻き込んだ国民運動を展開・強化し、国産の消費拡大、農業・農村の理解拡大をすすめるとともに、教育関係者、料理人、行政、団体・企業等による幅広いネットワークを構築することが重要。

【食育やSDGsの観点での新たな国民運動】



【政策面】
●食育やSDGsの観点から、食料・農業・農村にかかる既存の計画や施策を再検証・位置付け。
⇒特に、国産消費拡大や地産地消、農村振興等の意義を再認識し、施策を構築・強化。

【取り組み面】
●SDGsのもとに幅広い関係者による連携で、全世代への食育を推進。
*食育推進基本計画にも同様の方向性を明記することが重要

【「持続可能な食と地域を考えるシンポジウム」 (令和元年12月:東京農業大学)】



さあわたしたちの食を巡る未来を
いっしょに考えてみましょう。

**持続可能な食と地域を
考える** SDGsと食料安全保障の視点から
2019年12月17日 [火] 受付開始 14:00
開会 14:40 ~ 終了 17:00

会場 東京農業大学 世田谷キャンパス内 百周年記念講堂 定員 500名
入場料 無料

お問い合わせ先 株式会社共同通信社 03-6252-6044

(株)共同通信社と共催。全中中家会長をはじめ、経済界、生協など各界各層の代表者が参加。
大学生も講義の一環として、多く参加。食と農の大切さや食料安全保障の必要性などを理解。

最後に(3つのポイント)

1. 食育に関するJAグループの取り組み

「みんなのよい食プロジェクトを展開」「食農教育」
「バケツ稲づくりなど、様々な取り組みを展開」

2. Withコロナ(新しい生活様式)に向けて

「どこでも学べるオンラインの強みを活かして」
「バーチャル体験など新たな試み」

3. 第4次食育推進基本計画に向けて

「新たな食料・農業・農村基本計画との連動
(計画から実践:実効性ある取り組み推進)」
「SDGsや食育を起点に国民理解を深化」